

論說文的序論與結論

— 以「論壇」為例 —

王 世 和

東吳大學日本語文學系助理教授

中文摘要

本論文是分析文章架構的基礎研究，針對論說文的序論、結論進行考察。

自從時枝誠記（1950）提倡文章研究的必要性，學界累積了不少關於文章的各種研究。其中，永野（1986）不區分文章種類，嘗試解析適用於全部文章的法則，而永尾（1975）則主張文章種類的重要性，以特定種類的文章進行文章架構分析。儘管學者們留下卓越的研究業績，不過，似乎少有研究只針對論說文進行分析。本論文將考察對象限定於朝日新聞「論壇」的序論、結論部分，以此次的研究作為解析論說文文章架構的第一步，藉此希望將來能完整說明論說文的整體架構。

研究手法是，分析序論、結論中的句型，然後再思考使用這些句型的句子在文章中所肩負的功能。結果如下：一、序論裡有所謂的「提出話題」「表明主旨、立場」「提出問題」「解決問題」的用法；而結論中則只有「解決問題」的用法。二、結論的「解決問題」下，又可分為「義務」「希望」「要求」「勸誘」「提案」「條件」「方法」「指定」八種下位概念。

關鍵詞：論說文、「論壇」、序論、結論、文章架構

論説文の序論と結論について

—「論壇」を対象に—

王 世 和

東呉大学日本語文学系助理教授

要 旨

本稿は、文章構成の基礎的研究として、論説文の序論と結論との特徴について考察を試みたものである。

文章研究の必要性は時枝誠記（1950）により提唱されて以来、文章に関する様々な研究が積み重ねられてきた。永野（1986）が代表するような、すべての文章に通用する法則を究明しようとする研究者と、特定の種類の文章の文章構成を論じる永尾（1975）などの研究者との間に、文章に種類があるかどうかという研究態度の違いが見られるものの、それぞれ素晴らしい研究結果を残している。しかし、「論説文」だけを取り上げる研究が、管見ではまだ十分ではない。本稿では、論説文の文章構成を考えるための第一歩として、考察対象を朝日新聞の「論壇」の序論と結論にしぼり分析してみた。将来的には論説文の全体像を究明することへと発展できればと願っている。

分析手順としては、序論と結論に見られる文型に注目し、その文型が使用される文の、文章中における役割を考えてみた。その結果、序論には、「話題提起」「主旨・立場表明」「問題提起」「問題解決」という役割、結論には、「問題解決」という役割を果たす文が存在することが判明した。また、結論の「問題解決」の下位概念と

して、「義務」「希望」「要求」「勧誘」「提案」「条件」「方法」「指定」が取り上げられることも分かった。

キーワード：論説文、「論壇」、序論、結論、文章構成

Study of Argumentative Articles

– Based on “Rondan”

Wang, Shi-Ho

Associate Professor of Department of Japanese, Soochow University

Abstract

The present study is an initiative study of article construction that tries to examine the characteristics of the preface and conclusion in an argumentative article.

Since Matoki Tokieda (1986) who advocated the importance of article study, numerous of relative researches have been accumulated. While Nagano (1986) tried to analyze the rules that could be applicable to all kinds of articles in spite of the article attributes, Nagao (1975) advocated the significance of the article attributes and analyzed the article structure of different types. Although several remarkable researches have been undertaken, few studies focus on the analysis of argumentative articles. The present study is, therefore, to serve as an initiative study of argumentative article structure that aims to examine the preface and conclusion of the “Rondan” on Asahi News and to fully explain the overall structure of argumentative articles.

Sentence structures of prefaces and conclusions are analyzed and functions of these sentence structures are defined. Findings are as follows: (1) In the preface, usages of “thesis statement,” “topic and position clarification,” “problem raising” as well as “problem solving” are found, while in the conclusion, usage of “problem solving” is identified; (2) In the conclusion, concepts of “obligations,” “wishes,” “requests,”

“methods,” “inducement,” “assignment” and “proposals” are identified under the structure of problem solving construction.

Keywords: argumentative article, Rondan, preface, conclusion, article construction

論説文の序論と結論について

—「論壇」を対象に—

王 世 和

東呉大学日本語文学系助理教授

1. はじめに

本稿は、文章構成の基礎的研究として、論説文の序論と結論との特徴について考察を試みたものである。

文章研究の必要性は時枝誠記（1950）により提唱され、それ以来、文章に関する様々な研究、いわゆる文章論に関する研究が積み重ねられてきた。その中で、最も研究者の関心を集めているのは、文章はどのように構成されているか、すなわち、文章構成の問題のように思われる。しかし、文章構成に関する研究と言っても、先行研究を概観しても分かるように、多種多様な研究結果が残されている。その原因は色々と推測されるだろうが、何を考察対象にするか、という基本的な出発点に違いがあることが最も大きな原因ではないかと思われる。この観点に基づき、文章構成に関する研究を、以下のように大きく三種類に分類してみた。

一つ目は、文章の種類を区別せず、すべての文章に共通する法則を究明しようとする研究である。このような研究の中に、市川（1978）、永野（1986）、長田（1995）が挙げられる。

二つ目は、相原（1984）、西田（1992）が代表するように、文章全体について論じながら、文章に種類があることも考慮に入れ、特定の種類の文章に見られる部分

的な特徴について論じる研究である。

三つ目は、最初から文章に種類があるという認識を強く持ち、その大前提で、特定の種類の文章について文章構成を論じる研究である。このような研究態度を取っている研究者の中に、松永（1971）、永尾（1975）が取り上げられると思う¹。

上記の三種類の研究においては、一つ目は、その法則をすべての文章に適応させようとしているのに対し、三つ目は、考察対象を特定の文章の種類に絞り、そこに見られる言語事象を法則化しようとするものである。言ってみれば、一つ目と三つ目は両極端にあるような研究で、そして、二つ目は両方の特徴を備えている研究なのである。

本稿は、朝日新聞の「論壇」を考察対象として取り上げ、そこに見られる論説文の序論と結論との特徴について論じてみるものである。市川（1978）、永野（1986）、長田（1995）のように、すべての文章に共通する法則ではなく、論説文という特定の種類の文章の、文章構成の究明を試みるものなので、三つ目の松永（1971）、永尾（1975）と同じ立場となる。そして、前述したように、本稿を文章構成の基礎的研究と位置付けたのも、この「論壇」の研究を出発点にし、論説文という種類の文章に見られる文章構成を明らかにしようと思ったからである。なお、字数の関係で、本稿では「論壇」の序論と結論しか取り上げられなく、本論についての分析は、またの機会に譲ることとする。当たり前のことだが、本論には、読み手を説得するための書き手の考え方が述べられている。その述べ方にももちろん種類があり、また、それが序論と結論の書き方にも影響を与えるだろうと予想される。本論と序論・結論とは切っても切れない関係にあり、論説文の全体像を究明するためには、序論と結論だけを取り上げるだけでは不十分なところがあると言わざるを得ない。本稿では、序論と結論しか取り上げられないが、これを論説文の考察の第一歩にし、本論

1 松永（1971、p 73）では、「文章の法則認識を志す場合に、研究対象の同質性の吟味がまず必要なことであると思う。異質のものが混在している場合には、そこから法則的なものを抽象することは困難である」と述べており、文章研究の際、「研究対象の同質性」を強調している。

との関係などは、今後の課題として考えていきたいと思う。

2. 「論壇」について

ここでは、なぜ考察対象を「論壇」にしたか、ということを説明しておきたい。周知の通り、2001年の4月に「私の視点」に変わるまで、「論壇」は長年、朝日新聞の読者投稿欄として存在していた。週に四、五日で、毎日一人の文章、2000年の場合、計241の文章が刊行されていた。

まず、その重要性についてだが、1999年4月8日に、当時のイギリス外相ロビン・クック氏は「ユーゴ空爆」の正当性を日本国民に訴えるために、「ユーゴ空爆ほかに道はなかった」という題で「論壇」に投稿している。また、同じく「論壇」に掲載された「拝啓有馬文部大臣殿」（1999年5月10日）という読者の投稿に対して、6月11日に有馬朗人元文部大臣は、『『生きる力』をはぐくむ教育』という文章で返事をしている。2000年2月10日には、駐日米国大使・トーマス・フォーリー氏は、「思いやり予算」と呼ばれる在日米軍駐在経費について意見を述べている。この三つのことから分かるように、朝日新聞の「論壇」は、一般市民だけがする投稿欄ではなく、日本社会のみならず、国際社会からも高い注目を集め、信憑性の高いコラムのように思われる。

また、その投稿者の職業を見てみると、政府機関の役人、大学教授、弁護士、医者、文筆業者をはじめ、退職した一般庶民、無職の主婦、芸能界の人まで、実に様々な職業の人が含まれている。重要性と共に、普遍性も持ち備えているのが「論壇」の二つ目の特徴として認められるようである。

最後に、投稿字数は1640字（2000年）以内に限定されており、社説や天声人語などと比べても、朝日新聞の論説文の中で字数が最も多い。「序論・本論・結論」や「起・承・転・結」という文章構造を持っているといわれる論説文は、幾つかの

展開が予想される同時に、論を進めるのにある程度の字数が必要であろう。そのような特徴を持つ論説文の文章構成を考察するのに、朝日新聞の中で「論壇」が最もふさわしい研究対象ではなかろうか。

このように、重要性・普遍性と字数から見ても、論説文としての「論壇」の独自性が認められよう。特にその中の普遍性については、特定の人物が書いている社説や天声人語と違って、241人の、背景の異なる読者が書いた文書に似た書き方が存在していれば、それは特定の人の文体的な現象ではなく、多くの人に共通する普遍的な文章構成として認められる。そこに大きな意義があると思う。論説文の文章構成について考える第一歩の考察対象として、社説や天声人語ではなく、「論壇」にしたのも、こういう普遍性に注目したからである。

3. 先行研究の中の位置づけ

本論に入る前に、先行研究では論説文がどう論じられているかについて見てみることにする。これを考えるために、研究者の間で、果たして論説文が一つの研究対象として見られているかどうかを見てみたい。

前述したように、文章構成を考える際、文章に種類があるかどうかという認識の強さの違いにより、研究者の立場が三つに分かれている。たとえば、市川（1978）、永野（1986）、長田（1995）は、論説文を取り挙げ、その構造を論じていない。具体的に言うと、市川（1978）は、「文章の分類」を論じながらも、「文章の冒頭と結尾」の節では、文章の種類を区別せずに、冒頭の型を三類九種に、結尾の型を三類七種に分けている²。永野（1986）は、「接続論によって文脈展開の流れをたどり、連鎖論によって全体の結構を把握し、統括論によって文章としての統一と完結を最終的に確かめる——これが文法論的文章論の枠組みである」と述べており、すべて

2 市川（1978）、p 161～166 を参照されたい。

の文章に適応する「文法論的文章論」を提唱している³。長田（1995）は、「語」「文」「段落」の三つのレベルから「文章の構造の解明」を試みているが、やはり論説文だけを取り上げての論説ではない。

これらに対し、西田（1992）は「書き出しの型」を考える際、「主題や内容と書き出しとの関係」「書き出しにどんな文体を用いるか」「書き出しの表現にどんな文を用いるか」という三つの観点から、書き出しの類型を論じている。また、「結びの型」として、「全体のまとめのある結び」と「全体のまとめのない結び」の二種類を指摘している。この点は、永野（1986）などと同じように、文章の種類を区別していない。しかし、その一方で、「解説・説明文のスタイル」という特定の種類の文章を取り上げ、「論述型」「要点摘記型」「問答・会話型」の三つのスタイルを論じている⁴。文章の種類を意識していることも伺える。相原（1984）でも、文章の種類に触れることなく、一見永野（1986）などと同じ立場を取っているように見える。しかし、「主題の展開を規制するもの」を論じる際、「法律・規則の文章」「説明の文章」「論述の文章」「文芸—描写系の文章」「近代詩」に分けて論を進めていることや、「小説」「評論・説明」「随筆」に分けて、「冒頭と末尾」を論じていることを見ると、西田（1992）と同じように、文章の種類を意識していることが分かる⁵。

前にも触れたことだが、永尾（1975）は文章に種類があることを、文章研究の大前提と考えている。そして、文章の種類については、以下のように述べている⁶。

文章は、基本的には二種に分別することができると考える。一つは、特定の時に一回限りあった事件の話をする文章である。一般的には、小説、童話、あ

3 永野（1986）、p 103 を参照されたい。

4 西田（1992）、p 142～150 と、p 103～115 を参照されたい。

5 相原（1984）、「展開を規制するもの」は、p 44～80 を、「評論・説明の冒頭」と「評論の末尾」は、それぞれ p 158～168 と p 196～199 を参照されたい。

6 永尾（1993）、p 171。

るいは出来事を報告する記事等として見られる。他の一つは、いつもこうであるというような話し手の思いを述べる文章である。そして、後者は、さらに二つに分別することができる。その一は、唯一の帰着点を持つ文章であり、詩の形式で見られることが多い。その二は、段階的に統合点の進む文章であり、論説、評論として見られる。また、随筆として見られることも多い。文章は、一切で、二種三類に分別できると考えるのである。(下線は筆者)

文章に種類があることを前提に、文章構成を究明しようとした永尾(1975)は、明らかに永野(1986)などと研究の出発点が異なっている。

以上、文章の種類を区別するかどうかという観点に基づき、先行研究を概観してみた。それにより、文章の一種類としての論説文が、研究者にどれだけ注目されているかも分かった。論説文を取り上げて論じる研究者が少ないなか、永尾(1975)と相原(1984)だけが、研究成果の一部分として論述している。永尾(1993)では、「論説」「評論」「随筆」を一括して考え、「段階的に統合点の進む文章」として論を述べている。相原(1984)では、「説明の文章」と「論述の文章」に分け「展開を規制するもの」を分析し、また、「評論・説明」という種類の文章の冒頭と、「評論の末尾」を論じている。いずれも示唆に富んだ研究成果を残している。しかし、残念ながら論説文だけに焦点を合わせての研究とは言いがたい。文章構成に関しては、様々な角度から研究がされてきているにもかかわらず、論説文だけの文章構成についての研究があまりされていないのが現状のようである。そこで、本稿では、論説文としての「論壇」を取り上げ、その序論と結論に注目することにより、論説文の書き方について考えてみたいと思う。「論壇」という小さな点のような研究から始まり、論説文の文章構成という大きな面を究明することへと発展していけばと願っている。

4. 序論に見られる特徴

本節から、「論壇」の具体的な考察に入る。まず、序論にあたる書き出しに見られる特徴的な書き方を見てみる。

4.1 話題提起

例 1、 画家の丸木俊さんが一月十三日、夫の故位里さんの元へ旅立った。

(0202、I)

例 2、 新潟地検は三月三日、未成年者略取と逮捕監禁致傷の罪で三十七歳の男性を新潟地裁に起訴した。(0309、I)

例 3、 本年の四月から「新地方自治法」のもとで、地方分権の新時代がスタートした。(0609、I)

例 4、 今年の四月から日本でも介護保険制度がスタートする。(0204、I)

例 5、 いよいよ四月から介護保険制度が施行される。(0324、I)

例 6、 今月下旬に、韓国の金大中大統領が日本を再訪する。(0914、I)

例 7、 教師たちの関心がいま、今春から小中高校に導入される「総合的学習の時間」に集中している。(0327、I)

例 8、 昨年秋から、神奈川県警、新潟県警などで社会常識を逸脱した不祥事が相次いで報道されている。(0419、I)

例 9、 自民党は現在、労働組合費の給料から天引き（チェックオフ制度）を法律によって禁止する案を練っている。(0427、I)

上に挙げた 9 例はすべて文章の書き出しとなる、最初の文である⁷。何れも時間を表す語句が特徴的に見られるばかりではなく、文末に注目してみても、例 1～3 は「～した」、例 4～6 は「～する」、例 7～9 は「～している」となっており、過去・未来・現在の出来事について述べているのが分かる。「論壇」には、こうした書き出しで始まる用例は数多くあり、説明するまでもないが、上記の 9 例は、書き手が論じたい話題を取り上げる働きをしている。この文により読み手に話題を知らせることで、ここでは、このような文を、「話題提起」と呼び、これを序論の最初の特徴的な役割と認めることとする。

例 10、小渕恵三前首相が急の病に倒れ、森内閣が誕生した。(0425、I)

例 11、映画百余年の歴史にはアメリカの発明王エジソンも登場する。(0603、I)

例 12、東京都による大手銀行への外形標準課税問題が論議を呼んでいる。

(0301、I)

例 13、政府与党は、この通常国会で「循環型社会基本法」(仮称)の成立を目指している。(0306、I)

例 14、報道によると、ストーカー規制法案が超党派の議員提案で今国会に提出され、成立する見通しという。(0516、I)

例 15、この通常国会での憲法調査会の発足は、ひとつの政治的出来事である。

(0113、I)

例 16、今、地方自治体と地方議会にとって最大の関心事は、間近に迫った地方分権改革である。(0120、I)

「話題提起」と思われるほかの 7 例を挙げた。例 10～12 は、例 1～9 のような時間を表す語句は見当たらないが、「～した・する・している」で終わる点において

7 例文の後にある括弧内の数字は、日付と段落を示す。例えば、(0202、I) は、二月二日の一段落目。

は違いはない。例 13 は、時間表現の代りに、「この」が用いられ、例 14 は、情報の根拠を示すために、「～によると、～という」が使用されている。例 15、16 は、例 13 と同じように、時間表現の代りに「この」「今」が用いられる特徴を持っている。また、他の例と違って、動詞文でなく名詞文ではあるが、話題となる「憲法調査会」「地方分権改革」を取り上げる役割を果たしている。例 1～9 は、「時間表現、～した・する・している」という特徴を持っているのに対して、この 7 例は、さまざまな文型を見せているものの、例 1～9 と同じように話題を取り上げるということで、ここでは、以上の 16 例を「話題提起」としてまとめて考えてもよからう。

4.2 主旨・立場表明

例 17、先月下旬の論壇に掲載された森山理恵氏の「小学校の英語教育は一年生から」に異論を述べたい。(0808、Ⅰ)

例 18、日本が今年北西太平洋において実施した鯨類の捕獲調査（調査捕鯨）に対して反捕鯨国が非難し、米国はペリー修正法に基づく対日貿易制裁をちらつかせている。

この調査の真意については一般の人々に必ずしも正しく伝わっていないようなので説明したい。(1108、Ⅰ、Ⅱ)

例 19、臨床研修を必修化する医師法改正案が秋の臨時国会で審議されてきた。日本では、医学部学生は膨大な医学知識吸収に追われ、卒業時の診療能力はきわめて低い状態にある。卒業後数年の訓練によって、医師は実地経験をつみながら審査能力を獲得していく。その最も大切な最初の二年間の臨床研修を、将来診療に携わるべき医師に義務づけることが法改正の主旨である。臨床研修をより優れたものにし、国民医療向上に質するようにするために、意見を述べたいと思う。(1123、Ⅰ)

この三例は、二つの共通点が認められる。一つは、「～たい」という文型、もう一つは、「～に異論を述べたい」「調査の真意について～説明したい」「臨床研修をより優れたものにし、国民医療向上に質するようにするために」とあるように、いずれも何について述べたいかという文章の主旨を明示していることである。これを「論壇」の序論に見られる二つ目の特徴として認め、仮に「主旨表明」と呼ぶこととする。

例 20、米国の政策産業で働く研究者として、この改革と政策評価導入に批判と提言を試みたい。(1201、I)

例 21、久保田治郎教授の六月九日付「支援しよう途上国の地方分権」を読ませていただき、いくつかの開発途上国で医療協力の経験のある者として意見を述べたい。(0708、I)

例 22、私は在日韓国人の元軍属らの戦後補償訴訟に弁護士としてかかわってきた。その立場から意見を述べたい。(0117、III)

例 23、私は、「朝鮮籍」の在日コリアンであるが、ここでは法律家の立場から同法案について若干意見を述べておきたい。(0422、II)

この四例の「～に批判と提言を試みたい」「意見を述べたい」「～について若干意見を述べておきたい」というところは、例 17～19 と同じように、文章の主旨を表している。しかし、相違点もある。「～として」「～立場から」は、例 17～19 になり表現である。こういうものは、言ってみれば自己紹介のようなもので、自分がどのような者なのかを、本論に入る前に読み手に理解してもらうための文である。ここでは例 22、23 の「立場」を借り、仮にこういう文を、「立場表明」と呼び、「論壇」に見られる序論のもう一つの特徴として考えたいと思う。そして、この四例は、「主旨表明」と「立場表明」という二つの役割を同時に果たしていることを、確認しておきたい。

例 24、交通違反もみ消し事件の報道が続いている。その構造的要因については様々な分析がありうるが、背景には、違反取り締まりと交通安全の科学的関係が明確でなく、取り締まる側も取り締まられる側も、その有用性を信じていないという、見落としえぬ重要な論がある。交通事故に長くかかわってきた体験を踏まえて述べたい。(0607、Ⅰ)

例 25、在日一世の母を看護している体験をもとに、六十五歳以上の高齢者が十%以上を占める在日がどのような状況に置かれているか、その生活実態や福祉支援について述べてみたい。(0429、Ⅱ)

例 26、私は以前、アラ石に勤務し、クウェートとサウジに計十数年にわたって駐在した。また、日本貿易振興会（ジェトロ）リヤド事務所の初代所長を務めた。その経験をもとに提言をしたい。(0124、Ⅲ)

例 27、私は一九六二年に検察事務官から副検事となり、八六年に定年退職するまでの間、大半を東京や横浜の地方・区検察庁で交通事犯を担当した。その経験から、この問題について意見を述べたい。(0713、Ⅰ)

例 28、以前より私はケアの質に関する研究を進めており、最近英国とオーストラリアの監査制度を直に見る機会を得た。そこで、我が国のケアの質を高める監査制度としてはどのようなものが最適かを考えてみたい。
(0623、Ⅱ)

例 24、25 の「交通事故に長くかかわってきた」「在日一世の母を看護している」という書き手の「体験」は、例 20～22 の「として」に相当するものとして考えられ、例 26～28 は、複数の文を用いて、書き手自身が従事してきたことを具体的に述べている。この五例もまた一種の自己紹介という役割を果たしている。自分がどういう者なのか、また自分がどういうことをしてきたのか、ということを述べるのに、例 20～22 とは異なった書き方を見せてはいるものの、そのような自己紹介に

基づき、提言・意見などを述べたいという共通点も見られるのである。これらはすべて説得力を高めるために、本論に入る前に、自分の立場を読み手に伝えるという働きをしている文であり、「立場表明」の一種として考えられよう。

以上見てきたように、例 20～28 は、「立場表明」の役割を果たしているのが分かる。ここで大事なのは、これらの文は、同時に「主旨表明」の働きもしているということである。「批判と提言を試みたい」「意見を述べたい」「見落としえぬ重要な論～述べたい」「その生活実態や福祉支援について述べてみたい」「提言をしたい」「我が国のケアの質を高める監査制度としてはどのようなものが最適かを考えてみたい」などが、文章の主旨を表している。例 17～19 のように、「主旨表明」に止まる用例もあるが、例 20～28 が示すように、何について述べるかという「主旨表明」と、自己紹介のような「立場表明」が、同じ文に書かれている場合が圧倒的に多いのである。ここでは、無理にこの二つの役割を区別せず、一つにまとめて「主旨・立場表明」と呼び、序論の二つ目の特徴と認めることとする。

4.3 問題提起

例 29、問題は、親の扶養を必要とする「未成熟子」のいる夫婦の協議離婚である。(0524、Ⅱ)

例 30、私が問題にしたいのは、正当な指名が明らかでない首相の臨時代理が就任して、肅々とその後に行われた一連の超法規的な内閣総辞職の経緯である。(0418、Ⅱ)

例 31、発足した介護保険の要介護認定では、痴ほうの人の要介護度が上がらないということが指摘されているが、加えてもうひとつ、要介護認定における問題点を指摘したい。それは独居（その大部分が女性である）の要介護度が上がらないということである。(0405、Ⅰ)

上記の三例に見られる共通点として、二つのことが取り上げられる。一つは、「問

題」ということば、一つは、「A は B だ」という名詞文が用いられていることである。この二つのことを合わせて考えると、例 29～31 には「問題は～である」という共通点が存在することが分かる。そして、これらはいずれもある話題における問題点を指摘する働きをしていることで、ここでは、「問題提起」と呼び、「論壇」の序論における三つ目の役割として考えたいと思う。

例 32、ストーカー行為による事件が社会的な関心事となり、市民生活の安全を脅かす事態となっていることからすれば、そうした行為を規制するべく法整備を行うこと自体は結構なことである。しかし、提案されている具体的な規制措置の内容には重大な疑問がある。（0516、Ⅱ）

例 33、研究開発の推進に最も重要なのは人材であり、適材なくして研究開発の成功は望めない。ところが、これを確保するための研究人材マーケットが形成されていないのが、我が国の現状である。（0526、Ⅰ）

例 34、台湾総統に民主進歩党の陳水扁氏が当選したことで、中国と台湾の関係は冷え込み、北京は民進党の台湾独立の党綱領と陳氏個人の立場を攻撃の標的にするだろう。だが、中台兩岸の対立は構造的なもので、双方の主権をめぐる争いなので、指導者個人の意思で変えられるものではない。（0404、Ⅰ）

この三例の二文目には、いわゆる逆接表現の「しかし」「ところが」「だが」が使用されている。例 29～31 のように、「問題」という語句が見当たらないが、結論から言うと、これらの例は、あることを述べておいて、そして、逆接表現のある文を用いて、そのことの問題点を指摘しているように思われる。例 32 を例に考えると、「法整備を行うこと自体は結構なことである」と述べた後、「しかし、提案されている具体的な規制措置の内容には重大な疑問がある」という文により、問題点を言っている。また、例 29～31 に倣い、「しかし、問題は、提案されている具体的な規

制措置の内容である」と書き換えられるように、この三例は、例 29～31 と同じく「問題提起」の役割を持っていることが分かるであろう。

「問題は～である」という文型を持つ用例を「問題提起一」とするなら、「～。逆接表現、～」という文型の用例は、「問題提起二」として認められよう。ある話題の問題点がどこにあるかを、読み手に理解してもらうには、「問題」ということばを使う「問題提起一」の方がストレートで分かりやすい書き方である。しかし、「論壇」の中では、むしろ逆接表現を用いる「問題提起二」の方が圧倒的多いのである。このこととも関連するように、二回以上の問題提起をする場合も、「問題提起二」の方が使用されている。例えば、次のような三例がある。

例 35、 東京都による大手銀行への外形標準課税問題が論議を呼んでいる。しかし大方は、その是非論に終始し、その内側にある自治体の声はかき消され気味である。

首長に限らず、自治体職員の多くは地方分権を望み、独自に新税を創設できる課税自主権の拡大を望んでいる。この問題の是非を問われれば多くの職員が是と答えるであろう。しかし、むしろ論議は、そこから始められるべきではないか。 (0301、I～II)

例 36、 昨年六月に男女共同参画社会基本法が制定された。女性の社会進出が進む中、その社会的地位を保証する上でも画期的な法律と言える。だがその一方で、家庭などの日常生活における男女共同参画はまだほとんど浸透していないのが実情である。

(一段落中略)

答えは残念ながらノーである。先日閉会した女性二〇〇〇年会議でも「家事や育児について、男性にも女性と同じ責任を共有することを奨励する」という声明が出された。だが、日本では長引く不況とリストラの

嵐の中で、サービス残業を余儀なくされる人も増え、男性はますます家庭生活の場から遠ざかっているのが現状ではないだろうか。(0707、I～III)

例 37、 今、地方自治体と地方議会にとって最大の関心事は、間近に迫った地方分権改革である。ところが、その第一ステップともいえる自治体の条例整備が、最後の段階で足踏みさせられている。

(二段落中略)

地方分権一括法は四百七十五本もの法律からなる。自治体はそれらを受け、新たな条例を定めるか、自らが持っている条例の改廃を行わなければならない。ところが、この時期に至ってもなお、条例を完成させるために必要な国の政令・省令のうち公布されていないものがある。

(0120、I～IV)

上記の三例は「しかし」「だが」「ところが」という逆説表現により、問題提起をしている。このことは例 32～34 と変りはないが、二回ずつ使われていることが特徴的である。つまり、ここでは、一回だけの問題提起ではなく、複数の問題提起をしているわけである。そして、このような二回以上の問題提起をするばあい、「～。逆接表現、～」が使用されることは、「問題提起二」のもう一つの特徴として取り上げられよう。以下の二例はそれぞれ四回と七回の問題提起が見られる用例で、若干長くなるが、「問題提起二」の極端な例として取り上げてみたいと思う。

例 38、 日本の社会保険はボロボロになっている。制度の透明性と公平性が失われ、財政基盤が崩壊しつつある。介護保険がやっと発足したが、制度は欠陥だらけである。

日本の政治はどうしてこうも無能力で無責任なのであろう。年金・医療・介護は密接に関連しているのに、厚生省のなかでさえバラバラであ

り、総合化のために格闘した厚生大臣や総理大臣は一人もいない。小渕内閣は社会保障戦略の検討を開始するカッコウを示したが、首相の死去によって宙に浮いてしまった。

政治家は「小さな政府」を唱えつづけ、「自助」と「互助」で高齢化社会の到来に対応できるかのごとき幻想を振りまいてきた。

消費税導入騒ぎの衝撃を受けて一九八九年にゴールド・プラン（高齢者保険福祉推進十カ年戦略）を策定したとき、政府は高齢者介護にどれだけかの責任を負わなければならないことをシブシブ認めたが、財源の裏付けは提示されなかった。介護保険の導入は、「小さな政府路線」を実質的に放棄し、保険料と自己負担という「なしくずし」の負担増を国民に求めるものであったが、制度の有効性と公平性を正面から問いかける姿勢は示されなかった。（0617、Ⅰ～Ⅳ）

例 39、 現在、国民医療費は歯止めなく膨張し、健康保険組合など保険者の財政はまさに危機的状況だ。しかし、医療費の中身には不明瞭な部分が非常に多い。

病院窓口で自己負担を支払う際に受け取る領収書には、投薬料、検査量などの小計が記されているのみで、何という薬をどれだけ使ったか、単価はいくらかなどの詳細を知ることはできない。明細を記入した診療報酬請求明細書（レセプト）は、医療機関から直接、健保組合などの保険者に送られるが、厚生省は長い間、これを患者には見せないよう指導していた。

一般社会では、明細のない請求に対して簡単にお金を支払わない。ところが、医療においては、すべての国民が明細を知らないまま支払い続けて来たのである。医療被害者たちの声に押された厚生省が、患者本人の請求があればレセプトを開示するよう全国の保険者に通達してから

三年になる。しかし、その後も医療費の中身を明朗にしていく努力を厚生省は怠ったままだ。

窓口での自己負担分の払い過ぎが月に一万円以上ある場合は、本人に通知されることになっている。ところが、昨年、それを約半数の保険者が実施していないことが発覚した。しかも、今もほとんど改善されていない。

行政による監査で、医療機関が過剰に受け取ったお金を患者に自己負担分も返すことになった。しかし、監査と同様の個別指導で保険者に返還させる場合、患者本人への返還は一切されていない。

また、「レセプトでは単価が二百五十円以下の薬剤については数量がいくらであっても明細を記さなくてもよい」とするいい加減なルールが不正請求の温床になっているという専門家の指摘を何度も受けていながら、厚生省は放置したままである。(0630、I～VI)

二重線はいわゆる逆接表現に当たる部分で、下線は問題点を示す内容である。この二例の特徴については、次のことが言えるのではないかと思う。最初の問題提起では、まず、「欠陥だらけ」と「不明瞭な部分が非常に多い」という漠然とした問題点を指摘し、複数の問題が存在するのを示唆する。その後は、四回と七回の問題提起を以って、その「欠陥」「不明瞭な部分」とは何かを、詳しく補充説明している。言ってみれば、逆接表現が用いられる最初の文が総括的なことを言うのに対し、その後の文は具体的なことを述べる、という役割分担をしていると言えよう。この現象は例 35～37 にも見られる。例 38、39 は四回も七回も問題提起をしているわけで、極端な用例のように思われるが、逆接表現を使う「問題提起二」の文型を最大限に発揮した用例として見てもいいようである。

4.5 問題解決

序論に見られる最後の特徴的な書き方として、以下の五例を取り上げたいと思う。

例 40、新潟県警の不祥事は、警察の威信を失墜させてしまった。これでは、職務に励んでいる現場の警察官の士気も落ちざるをえまい。国民の警察に対する信頼感を回復するためには、警察制度とりわけ公安委員会制度の抜本的な改革が必要である。(0302、Ⅰ)

例 41、建設省は投票を前に、この計画に疑問をもつ住民たちと公開討論会を開き、住民投票を有意義なものにすべきである。また、住民投票の結果、住民の多数が「ノー」といったら、大義名分、すなわち公共事業の公共性が失われたものとして、即刻工事を中止すべきである。(0118、Ⅱ)

例 42、結論を最初に言えば、任期途中でのくら替えを理由とする辞職は禁じるべきである。(0602、Ⅲ)

例 43、私はこの際、大学や高校の機器整備ということだけではなく、授業を広く国民に公開する方策についても検討してほしいと思う。(1102、Ⅱ)

例 44、原発立地に関する重要な法案が国会で審議されようとしている。「原子力発電施設等立地地域の振興に関する特別措置法案」(以下、法案という)である。今月二十八日に衆議院商工委員会を開始し、十二月一日の会期末までの成立も予想されている。政局の動きに目を奪われている間に、わずか数日で、立地対策のため、新たな補助金や優遇措置を創出することを狙った法案が作られようとしている。慎重な審議を、と訴えたい。(1128、Ⅰ)

「～が必要である」「～すべきだ」「～してほしい」「慎重な審議を(せよ)」というのが用いられている。言うまでもなくこれらは、筆者が取り上げる問題はこう解決すべきだ、こうせよ、またはこうしてほしいということを、論説文の書き出しとな

る序論でいきなり述べているものである。ここでは、「問題解決」と呼び、序論の四つ目の役割として考えたいと思う。

5. 結論に見られる特徴

本節では、「論壇」における結論について考察する。前節では、序論に見られる特徴的な役割として、「話題提起」「主旨・立場表明」「問題提起」「問題解決」をまとめてみた。その多様な役割に対して、論説文の終わりにあたる結論の部分は、序論でも取り上げた「問題解決」の一つしかないようである。表Ⅰにまとめた通り、「問題解決」を言うための用法とその指標となる文型は多くの可能性があるが、その帰着は「問題解決」の一点のみで、書き手が提起したある話題の問題をどう解決したらいいかということ、ここにまとめて書くのである。以下、結論に見られる用法と簡単な説明とともに、その用法に用いられる文型と実際の用例を一例ずつ取り上げることとする⁸。

表Ⅰ、結論に見られる用法と指標となる文型

用法	指標となる文型
義務	～べきだ、～なければならない、～必要がある、...
希望	～たい、～てほしい、～願っている、...
要求	～が求められる、～が望まれる、...
勧誘	～ようではないか、～よう、...
提案	...～てはどうか、...
条件	ば、なら、.....
方法	～で、～によって、...
指定	こそ、が、

8 序論の例文と同じように、括弧内の数字は日付と段落を示す。たとえば、(0721、-I) は七月二十一日、後ろから一段落目。ちなみに、2000 年の「論壇」のばあい、241 の文章の中で、段落数は最多で 25 段落、最少で 6 段落あり、平均段落数は、12.6 となっている。

[義務]:「～べきだ」などを用いて問題点の解決方法を示し、また、「～べきではない」などで、問題解決のためにしてはいけないことを示す。以下のような例がある。

例 45、学校教育の国際化への対応を急ぐべきである。(0721、- I)

例 46、豊かな住生活を実現し資産形成を行うためには、環境整備という手法によって人格ならぬ「地格」をあげる必要がある。(0314、- I)

例 47、そのためには、裁判官人事となる勤務評定制度の法的整備、とりわけいま民間で採用されようとしている評価基準の明確化、本人開示及び不服申立制度の確立が不可欠である。このようにしてできた公正な勤務評定を基礎に、人事決定に際し一般国民も加わる諮問委員会の諮問をへることで、公正を裏付ける制度が必要である。(0503、- I)

例 48、世論の注意を喚起することは重要だが、危機感を煽ることが危機管理に貢献するとは限らないことを十分にわかまえなければならない。
(0517、- I)

例 49、我が国でも今後、第三者機関による監査制度を整備し、主人公である住民に結果が公表されるような制度が構築されねばならない。(0623、- I)

例 50、これらの問題を避けるには、研究評価のための権威ある独立の専門機関を設置し、訓練された専属の評価者を研究評価に加えるしかない。
(0621、- I)

例 51、九州・沖縄サミットは、日本の対外援助のあり方を反省する良い機会であり、貧困解消に向け ODA のかじを切り替えるにはこの好機を逃すべきではない。(0701、- I)

例 52、個人の災禍というものは、いつも万人の災禍の可能性であることを忘れてはならない。(0329、- I)

[希望]:「～たい」、「～てもらいたい・てほしい」「望む・願う」などで自分のしたいこと、他人にしてほしいこと、そうなってほしいことなど、書き手の希望を示す。

例 53、自己肯定感の持てる子に育てたい。きょうの頑張りの向こうに一回り大きな自分があることを信じられる子どもに育てたいと思う。(0406、-I)

例 54、NPT 加盟国政府は、そうした国際世論に留意しつつ、会議での交渉に臨んでももらいたい。(0411、-I)

例 55、「北」を排除しない全地域の住民に、大会の主催者になってほしい。(0426、-I)

例 56、それと同時に、健康にあるいは精神的に満ち足りた生活を送る方法を調べるために疫学研究が必要であることが、国民全体のコンセンサスとなるよう望んでやまない。(0407、-I)

例 57、国民は次々と現れる生命操作に対応できる抜本的な体制づくりを願っている。(0504、-I)

例 58、厚生省、日本医師会が、病院機能ならびに医師・看護婦の質の評価制度を強化し、認定病院と医師のデータベースを作成し、早急に公表されることを切望する。(0712、-I)

例 59、関係当局の英断をのぞむ。(0713-I)

[要求]:「～が求められる」「～が望まれる」などで、社会や世間が求めていることを示す。

例 60、教育の成果は国家・社会に還元されるものであり、将来を見据えた奨学金政策が求められる。(1017、-I)

例 61、このところ外形標準課税問題など地方と国の税財源論議が高まっているが、その前提として税の使われ方には効率性や透明性が求められている。

(0315、-I)

例 62、東京フォーラムの報告書も存在することであり、政府が積極的に核軍縮に関する行動計画の作成に参加し、米国など核兵器国と非同盟諸国との間に入って出来るだけ高いレベルでの合意に導く役割を果たすことが期待される。(0421、-I)

例 63、危機管理の必要性が叫ばれる今、早急に与野党を挙げて必要な法律を制定することが望まれる。(0418、-I)

[勧誘]:「～ようではないか」「～よう」などで、問題解決のために、読み手に何らかの呼びかけをする。

例 64、日本を「希望の島」に再生するため、「競争社会」に別れを告げ「協力社会」への道を歩み始めようではないか。(0110、-I)

例 65、小手先の減税はもうやめよう。(0201、-I)

[提案]:「～てはどうだろうか」などで、問題解決の方法を提案する。

例 66、我が国は、欧米諸国のように武器輸出や軍事協力によって中東産油国に対する影響力を強めることは出来ないため、場合によってはエネルギー安全保障の確保を目的に、政府の途上国援助(ODA)資金の活用も検討してはどうだろうか。(0125-I)

例 67、その財源を充実させ地方自治を振興させるよう、全国の知事さんや関係者も、横並びに安住せず寝た子を起こし、乱暴な「人騒がせ」の競争を始めてみてはどうだろう。(0223、-I)

[条件]:「ば」などの条件表明を用いて、どういう条件のもとで、どういうことが実現できるか、またその一方で、どういう条件でなければ、どういうことが実現できないかを説明する。この場合、書き手の訴えたいのは、「ば」

などの条件表現の前に来る内容である。

例 68、土地インフレに期待するのではなく、収益力をベースにした不動産投資市場が整備されれば、金融資産の一部が流れ込むはずだ。(0409、-I)

例 69、海上の森は博覧会后、万博を記念する自然公園とするならば、世界も理解できるし、国民も納得する。(0208、-I)

例 70、投資家が自らリスクを制御できる最低限の条件整備がなければ、外資や国民の貯蓄をベースとした資金は海外へ逃げていき、日本経済は成長資金を失う。(0320、-I)

例 71、そうでなければ治療・サポートシステムがどんなに整備されても、被害者が真に救われることなどない。(0329、-I)

[方法]:「で」や「によって」を用いて、問題解決の方法を示す。「条件」と同じように、書き手が訴えたい「問題解決」の方法は、「で」や「によって」の前に来る内容である。

例 72、知事と裁判所が現在ある情報公開条例を正しく解釈運用するだけで警察は一変する。(0419、-I)

例 73、两岸の対話と協力の過程を経ることで、さらに两岸の特殊な歴史的な関係に配慮することによって、初めて两岸の漸進的な和平プロセスをつくることができる。それによって、双方の敵意と誤解を解消して、真の两岸の友好と平和を打ち立てることができるだろう。(0404、-I)

[指定]:「こそ」「が」「こそが」によって、問題解決の方法を指定する。例 74 の場合、韓国の民主主義が、つまり「こそ」などの前に来る内容、が問題解決の鍵となる。

例 74、韓国の民主主義こそ、南北統一問題のよき受け皿であり、結果的に日本を含む東アジアの安全保障にも貢献することになろう。(0530、-I)

例 75、 むしろ、手抜き業者には懲罰的賠償が、少なくとも工事のやり直しを命じるべきだ。それが欠陥住宅を根絶させる近道だ。(0114、-II)

例 76、 この実態を米国にもっと伝えて、このような努力のないところには将来の国際競争力はないという認識を高めてもらうことこそが、米産業界そして議会の京都議定書への対応を積極的にさせる一番の道だと思われる。(0203、-II)

以上のように、結論において、「問題解決」を言うには、数多くの文型が用いられるが、それらが、義務・希望・要求・勧誘・提案・条件・方法・指定という八つの用法に分類されることができる。そして、実際の文章では、これらの用法をうまく組み合わせることによって、結論の部分が形成されていくのである。

6. おわりに、

本稿では、「論壇」の序論と結論を対象に考察をしてみた。具体的な方法は、用いられている文型に注目し、その文型が使用される文の文章中における役割を考えしてみた。考察の結果として、以下の表にまとめることができる。

表Ⅱ、序論と結論に見られる役割と文型

	役 割		文 型	
序 論	話題提起		(時間表現) ～した (する・している)、 ～によると～という...	
	主旨・ 立場表明		～たい、～として (～立場から) ～たい、...	
	問題提起		「問題は～である」、「～。逆接表現、～。」	
	問題解決		～が必要である、～べきだ、...	
結 論	役 割		用法	文 型
	問題解決		義務	～べきだ、～なければならない、～必要がある、...
			希望	～たい、～てほしい、～願っている、...
			要求	～が求められる、～が望まれる、...
			勧誘	～ようではないか、～よう、...
			提案	...～てはどうか、...
			条件	ば、なら、.....
			方法	～で、～によって、...
			指定	こそ、が、

論説文は、書き手が読み手に自分の意見を訴え、納得させるという強い目的を持つ文章である。その目的を果たすためには、本稿でまとめた「話題提起」「主旨・立場表明」「問題提起」「問題解決」などの役割が必要とされると思われる。序論の役割としての「話題提起」と「主旨・立場表明」は、いずれも論を進めるための土台作りのようなものである。しかし、「話題提起」は絶対必要な要素で、多くの文章に見られる特徴的な書き方であると言えるのに対し、「主旨・立場表明」は、読み手の信頼を得るためのもので、それを使用するかどうかは、実際の文章には個人差があるわけである。また、「問題提起」というのは、問題点を指摘するもので、文章の論述ポイントを明示するのに高い効果がある。特に、「～。逆説表現、～」

というような書き方をする「問題提起」が数多くの論説文に共通して見られることは重要な特徴として見逃せない。問題は、「問題解決」である。それが序論に現れるか、結論に現れるかは、問題をどう解決するかを最初に述べておくか、最後に持ってくるかによって決まってくる。論説の結論をいきなり序論で述べるのを嫌う人が多いようで、「問題解決」を文章の締め括りとして結論の部分に書く文章が殆どである。

本稿は論説文の文章構成を究明する目的で、その第一歩として、朝日新聞の「論壇」の序論と結論を考察してみたが、文章は生きたもので、論説文の序論と結論に関するすべての書き方が本稿で尽くされているとは思えない。しかし、表Ⅱにまとめた役割と文型が、不特定多数の人の文章に共通して見られることも、論説文の文章構成を考えると見逃せない大事な言語事象であろう。今回の考察では、序論と結論に見られる文型を抽出したことに止まっており、その使われている文型と内容の意味との関連について分析するところに至っていない。このような意味分析と、「論壇」における本論の部分、本論と序論・結論との関係、そして、社説や天声人語といった特定の人の書いた文章の分析などは、今後の課題として残っている。今回の考察は論説文の文章構成を考えるための一歩に過ぎないが、こうした地味な調査の積み重ねによって、論説文の全体像を究明していけることを願っている。

参考文献

相原林司『文章表現の基礎的研究』、東京：明治書院、1984。

市川孝『国語教育のための文章論概説』、東京：教育出版、1978。

時枝誠記『日本文法口語篇』、東京：岩波書店、1950。

永尾章曹『国語表現法研究』、東京：三弥井書店、1975。

永尾章曹「段階的に統合点の進む文章について」『表現学論考第三』、名古屋：今井

文男先生喜寿記念論文集刊行委員会、1993。

長田久男『国語文章論』、大阪：和泉書院、1995。

永野賢『文章論総説』、東京：朝倉書院、1986。

西田直敏『文章・文体・表現の研究』、大阪：和泉書院、1992。

松永信一『言語表現の理論』、東京：桜楓社、1971。